

博 多 147

- 博多遺跡群第193次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1235集

2 0 1 4

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。中でも博多区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する博多遺跡群の発掘調査報告書は電線類地中化工事に伴う調査成果についての記録です。この調査では古代末から近世まで連続と続く集落を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

平成 26 年 3 月 24 日

福岡市教育委員会
教育長 酒井龍彦

例言

- 本報告書は博多区博多駅前1丁目地内の電線類地中化工事に伴って2012年4月4日から6月27日にかけて発掘調査を行った博多遺跡群第193次調査の報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は福岡市経済観光文化局の今井隆博・屋山洋が担当した。
- 遺構・遺物実測、遺構・遺物の写真撮影は今井・屋山が、遺物実測と製図等を今井・屋山・濱石正子が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市埋蔵文化財センターに收藏・保管される予定である。
- 貿易陶磁の分類は大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-(2000年)太宰府市教育委員会を参照した。

遺跡調査番号	1201	遺跡番号	020127	分布地図番号	天神49
調査地番	福岡市博多区博多駅前1丁目地内				
開発面積	2624 m ²	調査面積	126.4 m ²	調査原因	電線類地中化工事
調査期間	20120404～20120627		担当者	屋山洋・今井隆博	

博 多 147

—博多遺跡群第 193 次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書1235集



遺跡略号 HKT - 193

調査番号 1201

2 0 1 4

福岡市教育委員会

本文目次

I	はじめに	1
II	調査の記録	4
	1区の調査	4
	2区の調査	9
	3区の調査	10
	4区の調査	12
	5区の調査	14
	6区の調査	14
	7区の調査	15
	8区の調査	15
III	小結	18

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
第2図	調査区周辺図 (1/4,000)	2
第3図	193次調査区位置図 (1/1,000)	3
第4図	1区実測図1	4
第5図	1区実測図2	5
第6図	1区実測図3	6
第7図	1区実測図4	7
第8図	2区実測図	9
第9図	3区実測図	10
第10図	4区実測図	11
第11図	5区実測図	12
第12図	6区実測図	13
第13図	7区全体図 (1/40)	15
第14図	SK077 遺構・遺物実測図 (1/20・1/3)	16
第15図	SK084 (1/30)・SK087 (1/40)	16
第16図	8区全体図 (1/40)	17
第17図	8区出土遺物 (1/3)	18

図版目次

図版1	1. 1区全景 (北西から)	2. 2区全景 (北西から)	21
図版2	1. 3区全景 (北西から)	2. 4区全景 (北西から)	22
図版3	1. 5区全景 (北西から)	2. 6区全景 (南東から)	23
図版4	1. SK053 人骨出土状況 (東から)	2. SK054 (北東から)	24
	3. SK058 (南西から)	4. SK059 人骨出土状況 (北から)	
	5. SK066 人骨出土状況 (北西から)	6. SK056 (東から)	
	7. SD029 (北東から)	8. SD068 (北東から)	
図版5	1. 7区検出状況 (南東から)	2. 7区完掘状況 (南東から)	25
	3. 7区検出状況 (北西から)	4. 7区完掘状況 (北西から)	
図版6	1. 8区検出状況 (南東から)	2. 8区完掘状況 (南東から)	26
	3. 8区検出状況 (北西から)	4. 8区完掘状況 (北西から)	

表目次

表	1	193次調査出土遺構一覧1	19
表	2	193次調査出土遺構一覧2	20

I. はじめに

1. 調査に至る経過

平成 23 年(2011 年)6 月 13 日付けで博多区地域整備部地域整備課から博多区博多駅前 1 丁目の駅前 10 号線における電線類地中化に伴う埋蔵文化財有無の事前調査依頼(23-1-58)が提出された。これは当地域が都市景観形成地区に指定されており、隣接する寺社群と調和した町並み形成を計るためである。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群の中に位置しているため、平成 23 年度に同じ道路で行われた 192 次調査で確認した遺構面までの深さと工事の計画を照らし合わせた結果、長さ 3.3～3.8m、幅 1.2～2.3 m、深さ 2.1 m 程のコンクリート製枘を埋め込む 6 力所で遺構が破壊されることが判明した。埋蔵文化財審査課では電線類地中化工事に先んじて埋蔵文化財の発掘調査を行い、記録保存を図ることが必要であると判断して地域整備課と協議を行った結果、平成 24 年 4 月 4 日から 6 月 27 日にかけて発掘調査を行った。調査中は当初予定になかった廃土を場外搬出するためのダンプの提供など工事関係者を含め多くの人の協力を得た。記して感謝したい。

2. 調査の経過

調査区は現在使用中の道路上に位置するため、調査時には 9 時から 17 時まで車道部分を通行止めにして調査を行った。調査はコンクリート枘を埋設する 6 力所を対象とし、北西端を 1 区とした。その後ケーブル埋設部分 2 力所の掘削が遺構面に及ぶことが判明したため、追加で 7・8 区を設定した。調査は工事の工程に合わせて 2 区→5 区→3 区→4 区→1 区→6 区→7 区→8 区の順に行い、2 区から 6 区までは屋山が、7・8 区は埋蔵文化財審査課事前審査係の今井が担当した。各区の調査の工程は 1 日目がアスファルトの除去と重機による掘り下げ、矢板等の設置を行い、2～3 日目に埋蔵文化財の発掘調査、4 日目に降がコンクリート枘の埋込みと電線埋設工事で、埋蔵文化財の調査担当者は 1～3 日目に立ち会い、調査区以外にも慎重工事対応の区間などでは掘削工事に立ち会うことがあった。

3. 調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会 (発掘調査 平成 24 年度; 整理報告 平成 25 年度)

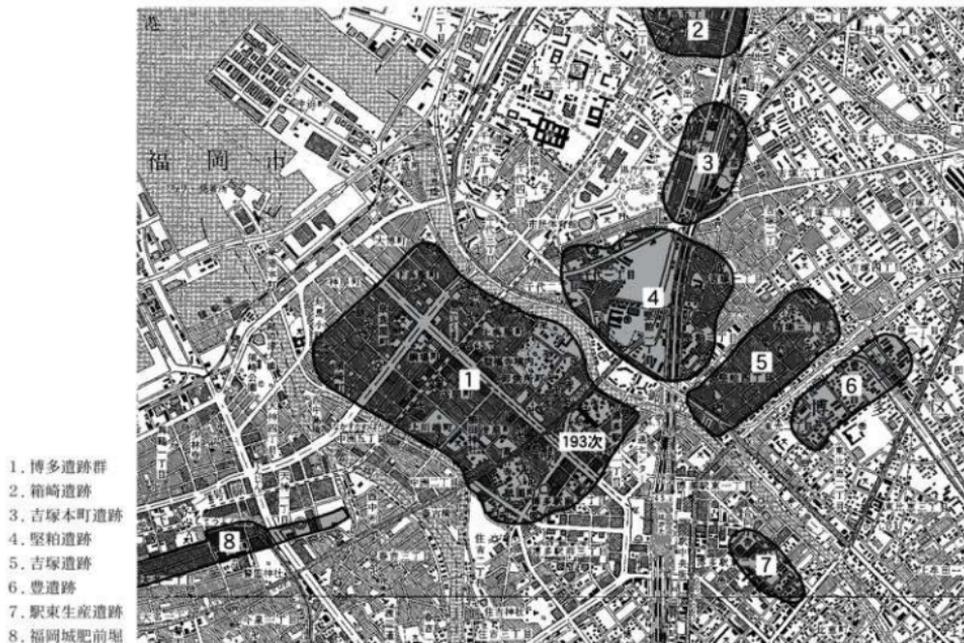
調査統括	経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課	課長	宮井善朗
		調査第 1 係長	常松幹雄(発掘調査)
		調査第 2 係長	榎本義嗣(整理報告)
調査庶務	埋蔵文化財審査課管理係		川村啓子
調査担当	埋蔵文化財調査課		屋山 洋
	埋蔵文化財審査課事前審査係		今井隆博

作業員 安東昌信 兼田ミヤ子 桑原美津子 芹川淳子 竹内武俊 中村健三

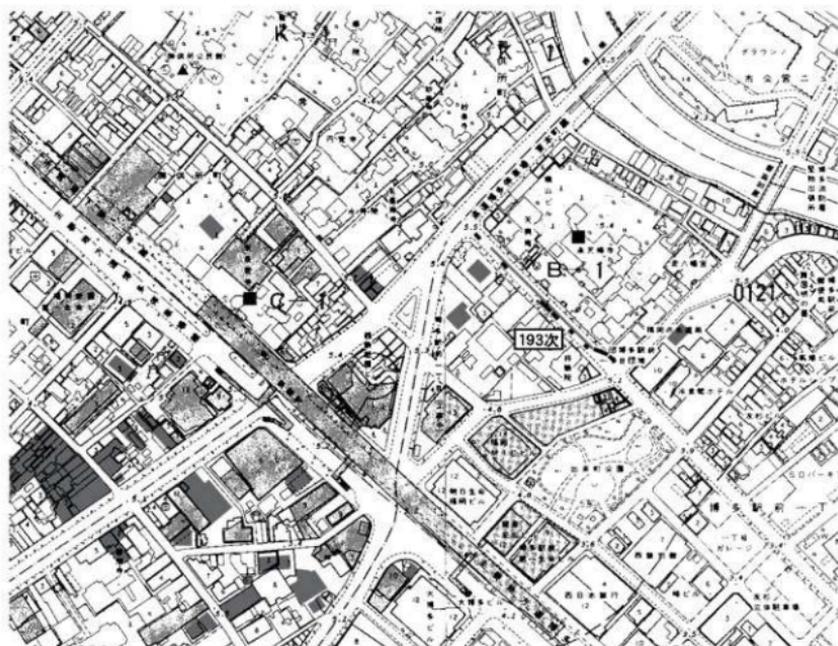
整理作業員 坂口龍子 藤野洋子

4. 遺跡の立地と環境

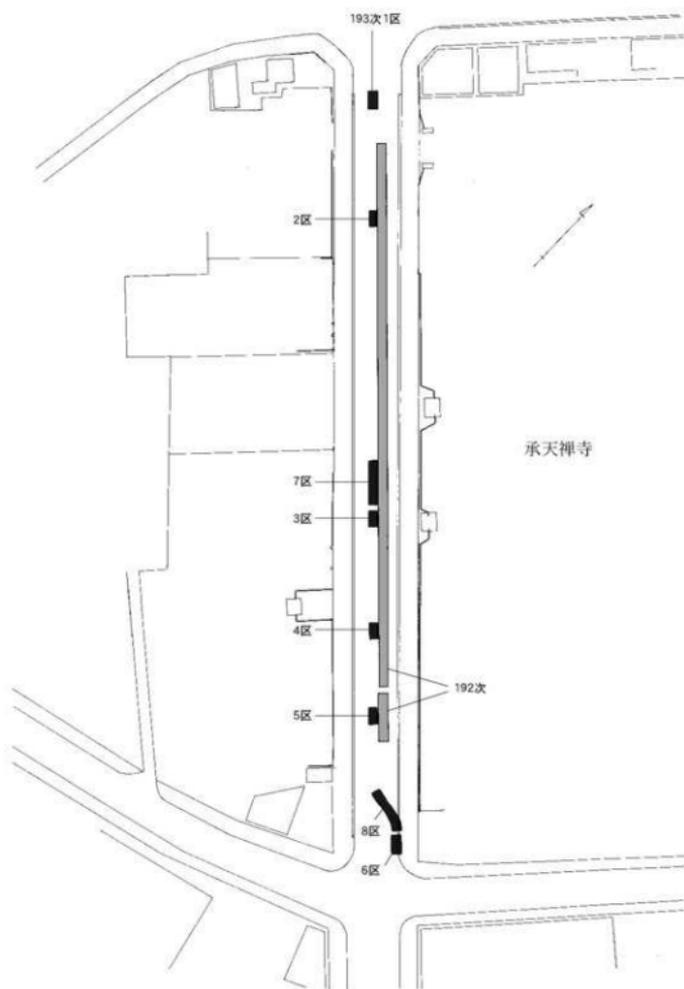
今回の 193 次発掘調査地点は博多遺跡群の南東端に近く承天寺境内の中央を通る市道博多駅前 10 号線上に位置する。この道路は 1963 年の区画整理の際に承天寺の寺域を東西に分断する形で通されたため 193 次調査区の大半はそれまで承天寺境内に属していた。承天寺は 13 世紀中頃に円爾によって開かれた名刹で中世都市博多の発展に大きく関わってきた寺院である。今回の 193 次調査は面積が狭く分断された調査区ではあるが、承天寺寺域内の調査という貴重な機会を得たものである。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

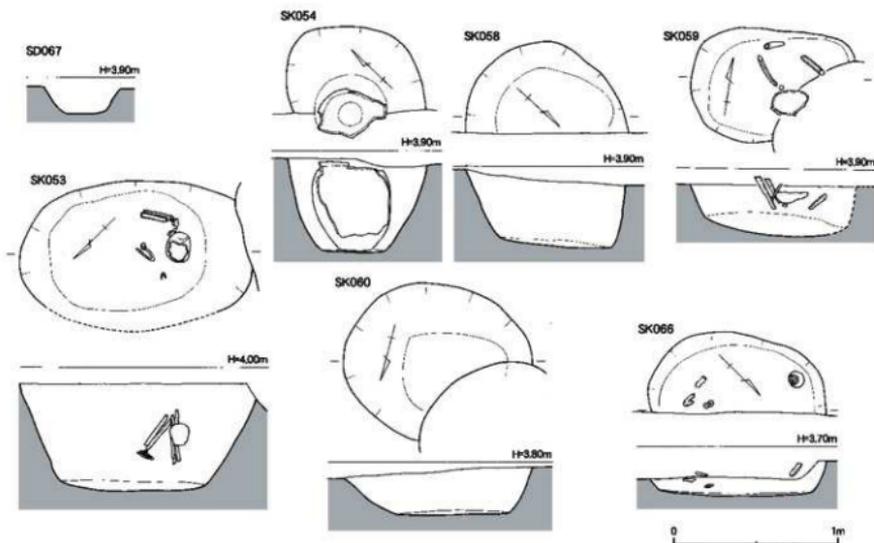
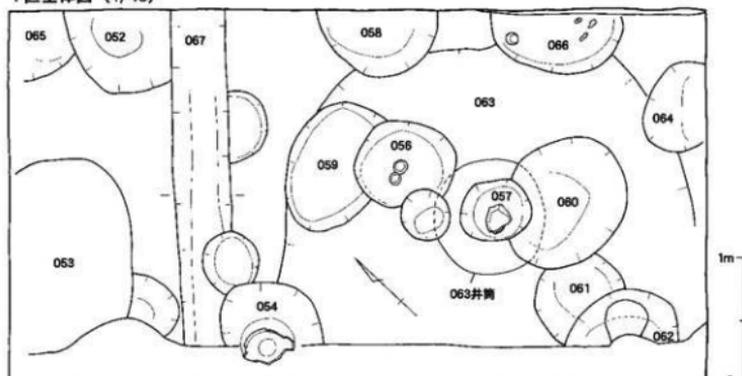


第2図 調査区周辺図 (1/4,000)



第3図 193次調査区位置図 (1/1,000)

1区全体図 (1/40)

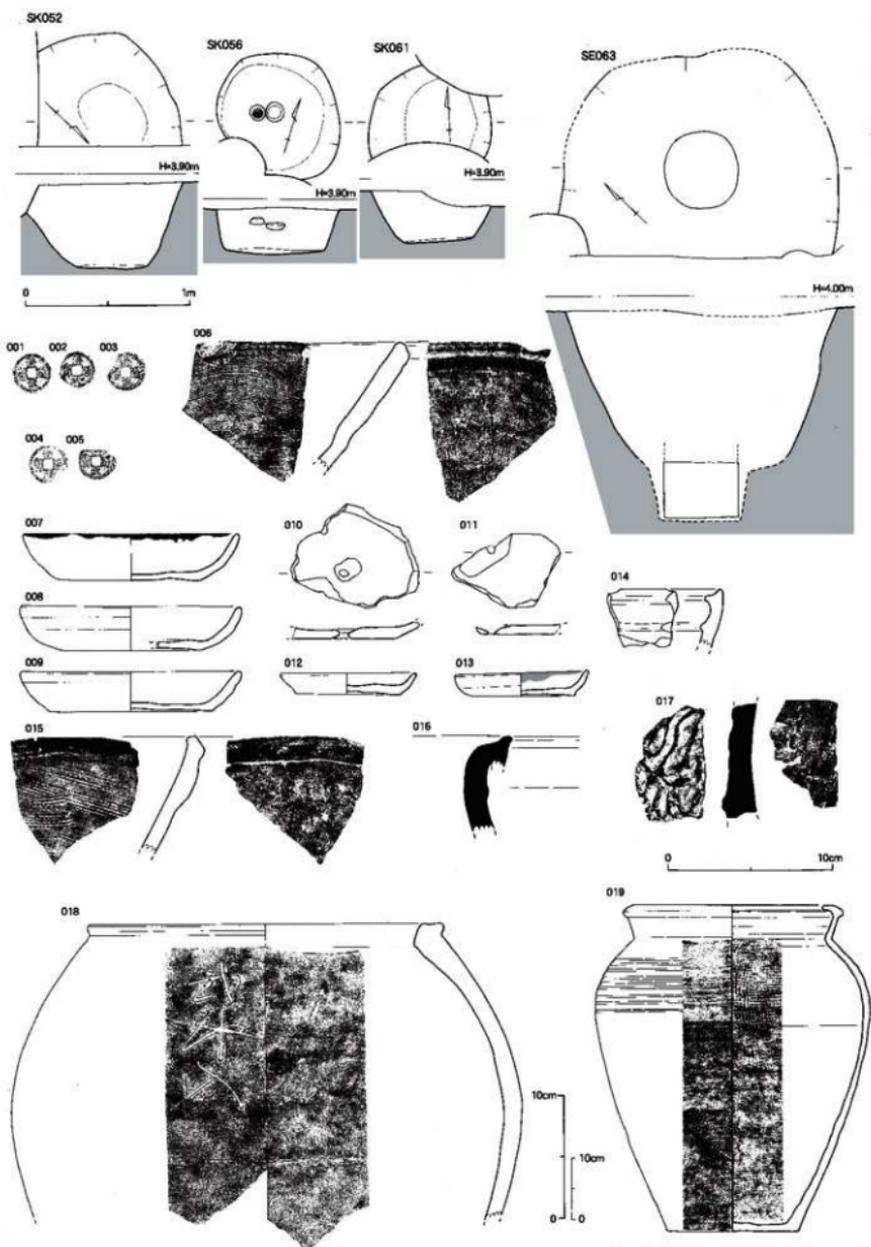


第4図 1区実測図1 (1/40・1/30)

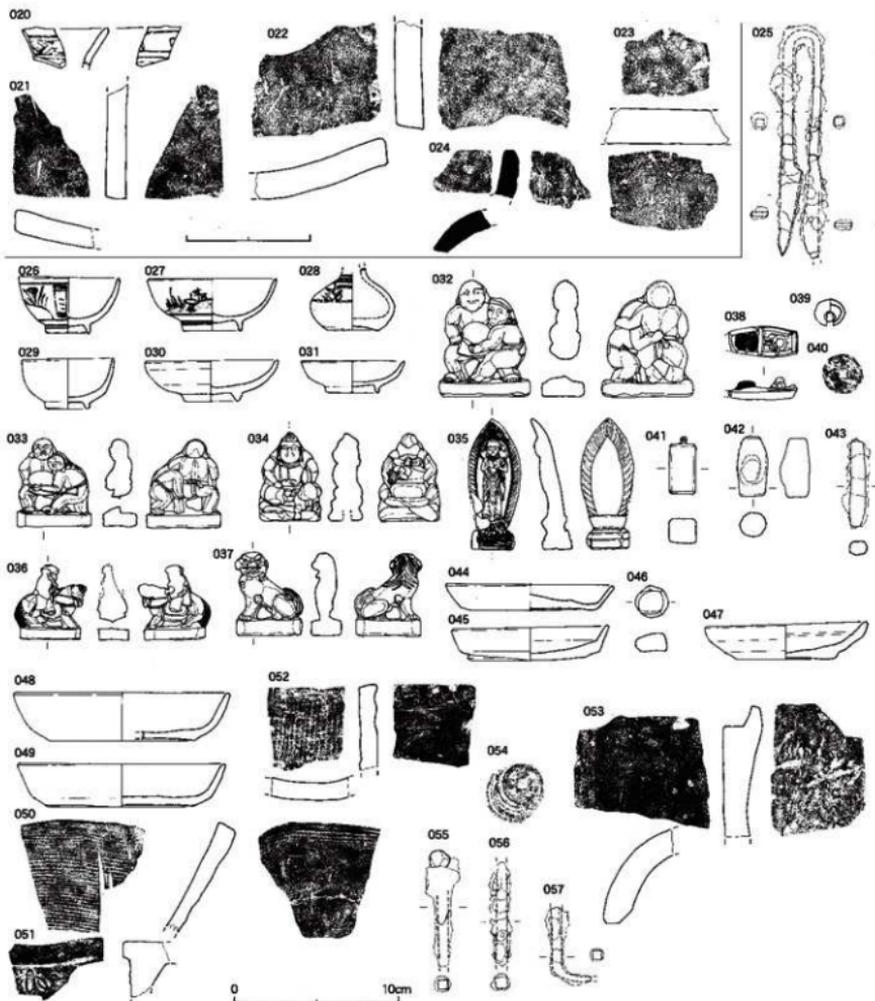
II. 調査の記録 調査は長さ60mの道路の上に8カ所が点在する。アスファルト上面の標高は北西端で5.5m、南東端で5.1mを測る。

1区の調査 調査では道路面から約160cm下の砂丘面まで掘り下げて遺構検出を行った。

1. 墓 砂丘上で6基を確認した。副葬品として出土した銅銭の遺存状態は不良である。現在重なったまま保存しており、銭種は不明である。第5図の018は重機で掘り下げ中に出土した瓦質甕で口径28.6cmを測る。内外面黒色を呈し、外面に『2斗入』の線刻があり、容器を転用したものである。SK053(第4図)土壇墓で平面楕円形を呈す。径140cm×90cm、深さ65cmを測り、主軸をN-45°-Eに取る。成人の頭蓋骨と四肢骨の一部の他に銅銭6枚と糸切り鋏が出土した。出土遺物(第6図020



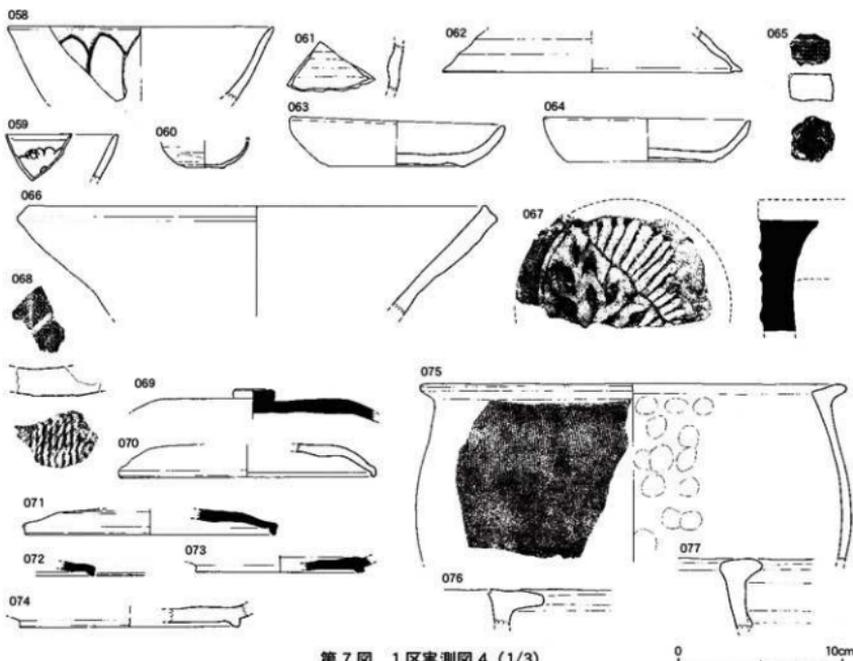
第5図 1区実測図2 (1/30・1/3・018は1/4)



第6図 1区実測図3 (1/4・1/3)

～024)。020は染付磁器碗、021-022は土師質平瓦で、021は暗褐色を呈し厚さ1.7cmを測る。022は赤褐色を呈し厚さ2.3cmを測る。調整は両面とも丁寧なナデを施す。023は土師質の埴である。赤褐色を呈し、厚さ2.8cmを測る。024は須恵質丸瓦である。

SK054(第4図) 妻棺墓で小児骨が出土した。掘方は隅丸方形を呈し、径81cm、深さ36cmを測る。棺は陶製甕(第5図019)で器高53.1cm、復元口径35.7cmを測る。出土遺物(第6図026～043)026～028は染付磁器で、028は茶色で描画し線に沿って赤色顔料を塗布する。029～031は白磁の碗と皿である。032～037は土製品で淡赤茶褐色を呈す。038は胎土は似るが、薄く透明な釉を施す。038



第7図 1区実測図4 (1/3)

以外は底部に1～5mm程の穴が開く。胎土は細かく砂を含まない。表面の窪みに白く粉状の塗料が残る。032-033は相撲取りで未報告の1点を加え3点が出土、034は大黒天、035は仏像、036は騎乗した武士、037は獅子、038は俵を積んだ小舟である。033-036以外は表面が摩滅しており、生前玩具として使用したと思われる。039は土鈴で径1.9cm、淡褐色を呈す。040は銅銭9枚が重なって出土した。041は銅製権で高さ3.44cm、幅幅1.52cm、重さ53.09gを測る。042は金属塊で錆びて一部が膨らむが元は砲弾型を呈す。高さ3.6cm、径1.7cm、重さ63.65gを測る。043は不明鉄製品である。SK058(第4図) 遺構の北半が調査区外に延びる。平面は円形を呈し径97cm、深さ47cmを測る。人骨は遺存していなかったが、埋土中から銅銭が10～12枚重なって出土した(第5図001～005)。遺存状態は不良で細片化しつつあり、現在銭銘が判る5枚はすべて洪武銭で、残りは判読不能である。SK059(第4図) 土墳墓で隅丸長方形を呈し、径1.0m×0.7m、深さ0.3mを測る。成人の頭蓋骨と四肢骨の一部が出土した。人骨はかなり削平を受けており遺存状態は不良である。SK060(第4図) 平面楕円形を呈し径114×95cm、深さ29cmを測り主軸をN76°-Eにとる。人骨は出土しなかったが、銅銭が重なった状態で出土したため土墳墓とした。出土遺物(第6図048～053)。048-049は糸切りの土師坏で048は復元口径13cm、器高2.9cmを測る。淡灰褐色を呈す。049は復元口径12.4cm、器高2.6cmを測る。淡赤褐色を呈し一部口縁に煤が付着する。050は土師質片口鉢で外面はナデ、内面はハケを施す。粘土帯の痕跡が残り調整は粗い。051は瓦質の軒平瓦である。052は須恵質平瓦で凸面は粗いナデを施す。053は瓦質丸瓦である。丁寧なナデを施す。054は銅銭6枚が重なって出土した。1番上は寛永通宝である。055～057は鉄釘と思われる。木棺に使用された可能性がある。出土した遺物は多いが確実に墓に伴うのは銅銭のみで他は混入の可能性が高い。SK066(第4図) 遺構の北半が調査区外に延びる。平面形は楕円形で長径105cm、深さ22cmを測る。

人骨の遺存は悪く埋葬姿勢は不明である。床面から少し浮いて土師皿と糸切り鉢と銅銭が出土した。銅銭は9～10枚で一部に白い布が残る。出土遺物(第6図025・047)。025は鉄製の糸切り鉢である。長さ13.5 cmを測る。047は糸切りの土師皿で口径9.7 cm、器高2.3 cmを測る。

2. 土坑

SK052(第5図) 遺構の大半が調査区外に延び、現状で径90 cm以上、深さ50 cmを測る。須恵器坏や古代末の瓦が出土した他、糸切りの土師坏や皿の破片が出土した。中世後半か。

SK056(第5図) 掘方は楕円形を呈し、径82×69 cm、深さ28 cmを測る。主軸をN-59°-Wにとる。底面から20 cm程度上で糸切りの土師皿2枚が出土した。出土遺物(第6図044～046)。044は口径口径10 cm、器高1.6 cmを測り、暗赤褐色を呈す。045は口径9.4 cm、器高2.1 cmを測る。淡橙褐色を呈す。046は滑石製の平玉である。径1.9 cm、高さ1.15 cmを測る。石鍋の再加工作品である。

SK061(第5図) 径74 cm、深さ31 cmを測る。糸切りの土師皿片が出土した。

3. 溝

SD067(第4図) 現地割りに沿った溝でSK052(中世後半)を切る。幅45 cm、深さ18 cmを測る。遺物は出土していないが、切り合いから中世後半から近世と考えられる。

4. 井戸

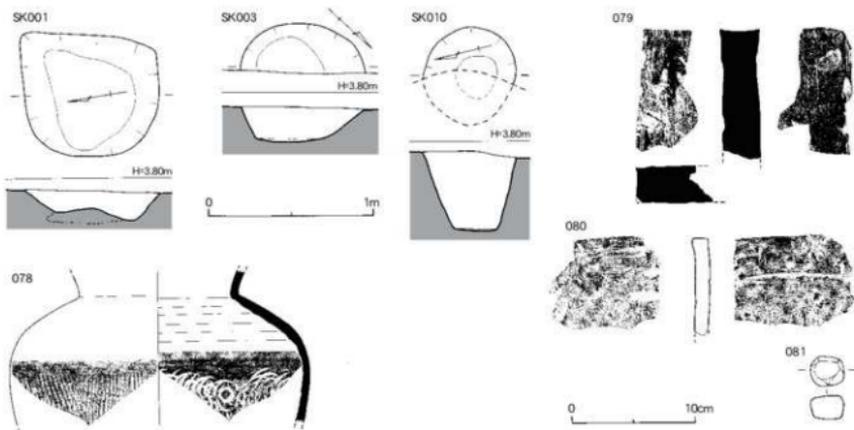
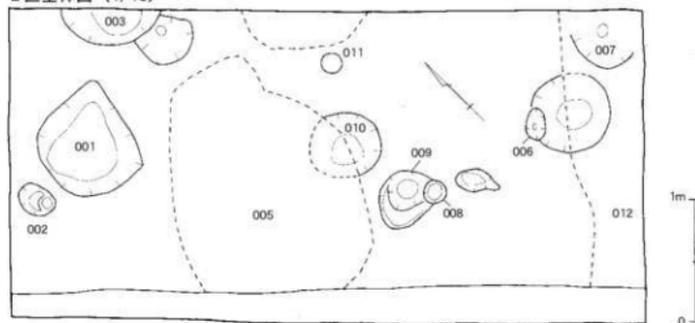
SE063(第5図) 調査区南西に位置し、南西側は調査区外に延びる。土壌墓群に切られる。平面は円形を呈し径3.3 m、井筒は径90 cmを測る。検出面から井筒底までの深さは2.5 mを測る。13世紀頃と考えられる。出土遺物(第5図006～017)。006～014は井筒から出土した。006は瓦質鉢である。淡灰褐色を呈す。007～011は糸切りの土師坏で007は口縁と外面の広い部分に煤が付着する。口径13 cm、器高2.8 cmを測る。008は復元口径13.2 cm、器高2.7、009は復元口径13.2 cm、器高2.5 cmを測る。010・011は底面中央に穿孔を施す。012・013は糸切りの土師皿で013は口縁と内面に煤が付着する。口径と器高は012が8.1 cmと1.3 cm、013が8 cmと1.6 cmを測る。014は陶器鉢I類、015は瓦質鉢で外面暗灰色、内面灰白色を呈す。016は常滑焼きの陶器裏である。017は須恵質軒丸瓦で草花文を施す。

5. その他の遺構と遺物 057は柱穴であるが多彩な遺物が出土したので報告する。

SP057 SE063を切る柱穴で根石が出土した。(出土遺物第7図058～068)。058は龍泉窯系青磁碗II類、059は青磁碗小片である、060は陶器小壺で茶褐色の胎土に黒色釉を施す。061は陶器壺で内面にガラスが付着しており増埒として使用している。062は陶器蓋、063・064は糸切りの土師坏で064は内面に薄く煤が付着する。065は土師質瓦玉で、赤褐色を呈し径2 cmを測る。066は土師質挿鉢である。復元口径28.6 cmを測る。淡褐色を呈し内外面の一部に煤が付着する。067は須恵質軒丸瓦で草花文を施す。068は土師質の平瓦で凸面に縦目タタキ、凹面に布状圧痕を施す。

第7図069～077は出土した遺構の時期に伴わない混入遺物で弥生時代から中世前半の土器である。069は須恵器坏蓋である。070は土師質坏蓋でSK054から出土、071・072は須恵器坏蓋でSK053から出土した。071は外面灰色～暗灰色を呈し、内面はやや赤味を帯びる。外面がヘラケズリ、内面はナデを施すが、調整は丁寧で胎土も精良である。072は白色を呈し、焼成不良で調整もやや雑である。073・074はSD063から出土した高台付坏で073は須恵質、074は土師質である。075～077は弥生時代中期の裏で075はSE063から、076がSK053から077がSK056から出土した。

2区全体図 (1/40)



第8図 2区実測図 (1/40・1/30・076～080は1/4・081は1/3)

2区の調査 遺構はまばらで土坑3基と柱穴状遺構が出土した。005は木の根による攪乱である。

1. 土坑

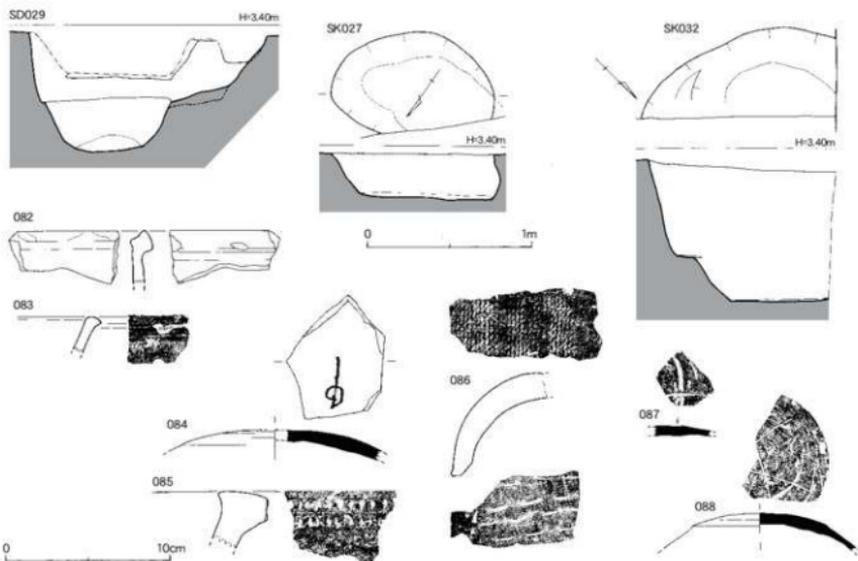
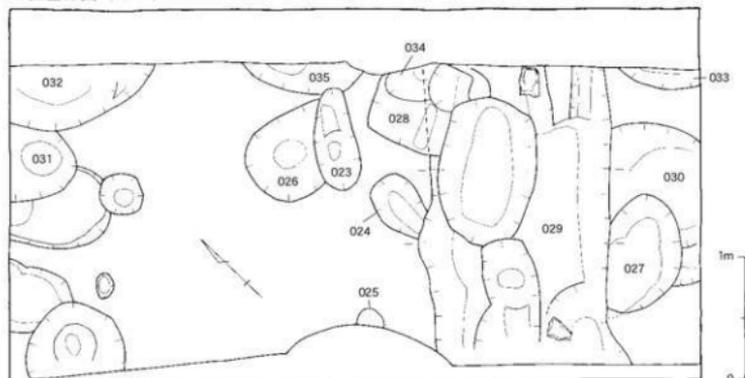
SK001(第8図) 長径81cm、深さ16cmを測る。白磁碗や糸切りの土師環・皿片が出土した。古代末から中世と考えられる。

SK003(第8図) 遺構の大半が調査区外に延びる。現状で径82cm、深さ21cmを測る。青磁碗・皿の他、ガラス溶解用に増場として使用した陶器壺や鉄滓等が出土し、多様な工房群が存在したと考えられる。時期は中世である。

SK010(第8図) 円形を呈し、径60cm、深さ48cmを測る。須恵器は提瓶の他に杯蓋が出土した。古墳時代後期と考えられる。

2. その他の出土遺物 078は須恵器壺である。SK003から出土した。淡赤褐色を呈し外表面には細かな白色砂、内表面には少量の雲母片が見られる。079～081はSK005(攪乱)から出土した。079は須恵質埴で厚さ約3cmを測る。灰色を呈し調整は粗いナデを施し砂はほとんど含まない。型の側面と底面に厚さ5mm程の粘土板を張り付けた後、同じ厚さの粘土板を適当に押し込んで上から

3区全体図 (1/40)



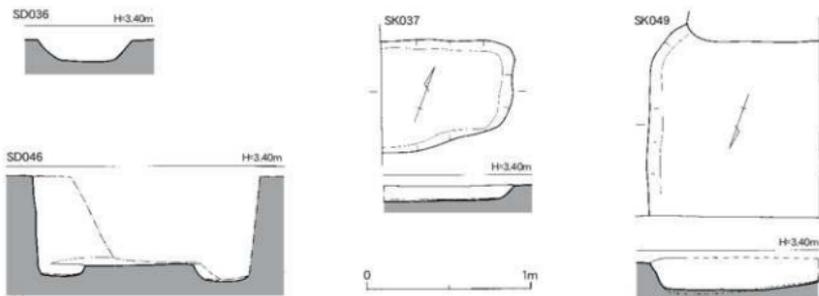
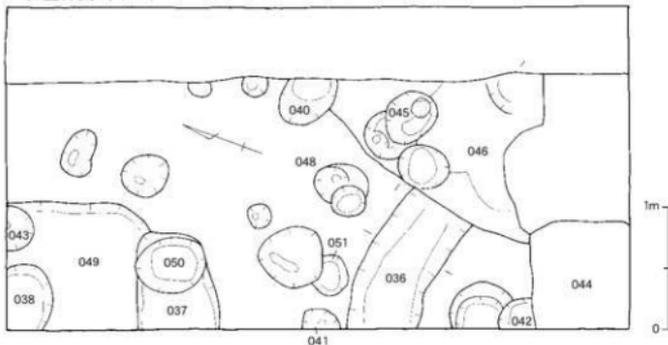
第9図 3区実測図 (1/40・1/30・1/3)

強いナデで整形している。080は須恵質平瓦である。厚さは1.3cmと薄手で凸面はナデ、凹面は布圧痕の上からナデを施す。081は須恵質の瓦玉で長径2.05cmを測る。

3区の調査 道路に直交する布掘りの溝と土坑、柱穴が出土した。

1. 溝 SD029(第9図)幅1.5m程の溝と思われる。主軸はN-46°-Eで現在の地割りとほぼ同方向である。現状で深さ50cm前後を計り、底面には径1mの掘込みがある。両端で根石が出土したが、掘り下げ時に中央部で1基外してしまったため、本来は1m程の間隔で並んでいたと思われる。出土遺

4区全体図 (1/40)



第10図 4区実測図 (1/40・1/30)

物(第9図082・083)。現地割りに沿っており太閤町割以後の可能性が高いが、出土遺物は新しいものでも12世紀頃のものである。082は陶器盤1類で12世紀前半である。083は古墳時代の須恵器器台で外面は暗灰色で口縁下に波状文を施す。内面は灰釉がかかり灰白色を呈す。

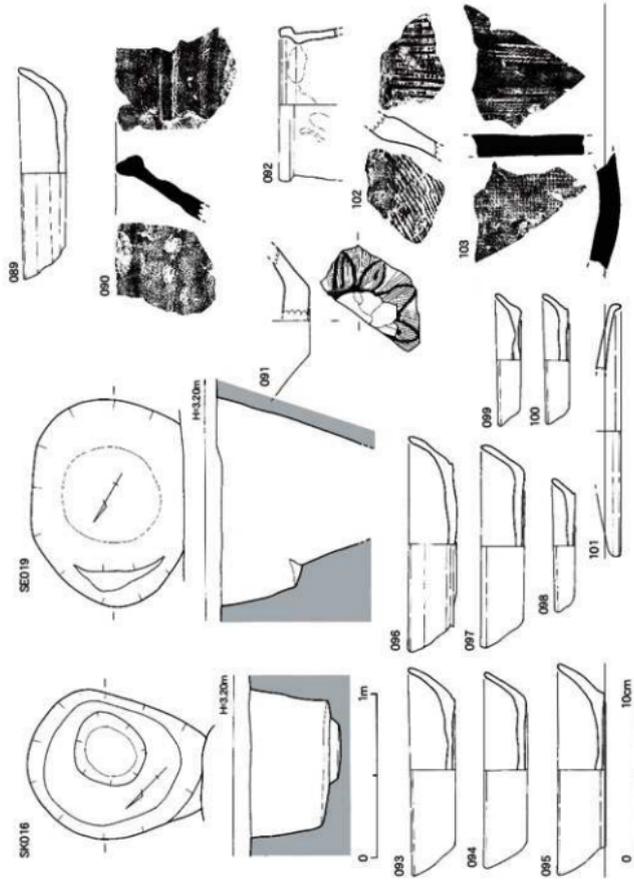
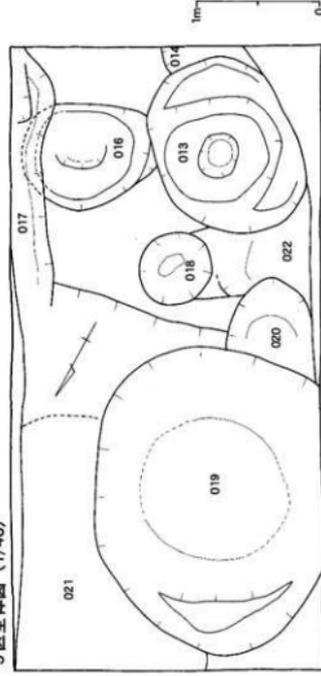
2. 土坑 SK027(第9図)遺構の一部をSD029に切られる。深さ28cmを計る。白磁碗Ⅹ類や褐釉陶器片が出土した。13世紀後半と考えられる。

SK030 SD029に切られる。径約1.3m深さ56cmを測る。覆土は暗褐色砂質土で、上半分は炭化物小片を含む。糸切りの土師皿が一枚出土した。

SK032 遺構の大半が調査区外に伸びる。調査区内では深さ83cmを測り、埋土は暗茶褐色砂質土で暗灰褐色土の小ブロックを含む。13世紀の貿易陶磁器の他、弥生時代の甕棺片等が出土した。出土遺物(第9図084・085)、084は須恵質の坏蓋である。灰白色を呈し、胎土にはほとんど砂を含まない。内面は丁寧なナデ、外面は丁寧なヘラケズリを施す。外面に『中』の墨書がある。085は弥生時代前期末から中期初頭の甕棺口縁部である。淡褐色を呈し細かな白色砂を多く含む。口縁端部に刻目を施す。博多遺跡群で出土する遺物の中では古い部類に属する遺物である。

3. その他の出土遺物 086は土師質丸瓦で淡赤褐色～淡褐色を呈す。028(攪乱)から出土した。凸面は縄目圧痕の上からナデを施す。内面には布圧痕が見られるが爪形もしくは直線上の連続した窪みが4列みられる。087・088は034(柱穴状遺構)から出土した須恵器坏蓋でいずれも外面天井部に線刻を施す。087・088とも暗灰褐色を呈し、胎土に1mm程の白色砂を多量に含む。

5区全体図 (1/40)



第11図 5区東測図 (1/40・1/30・1/3)

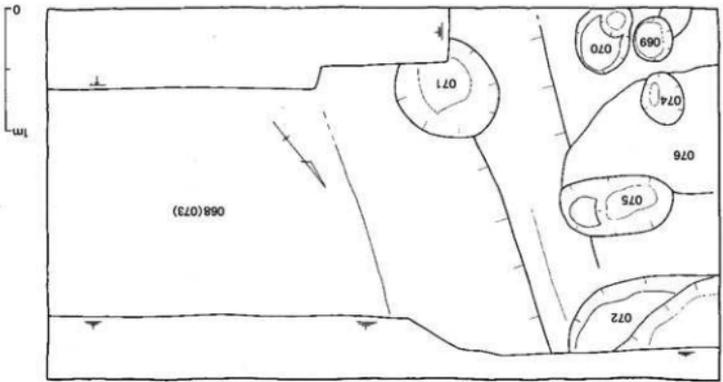
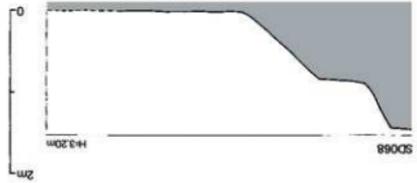
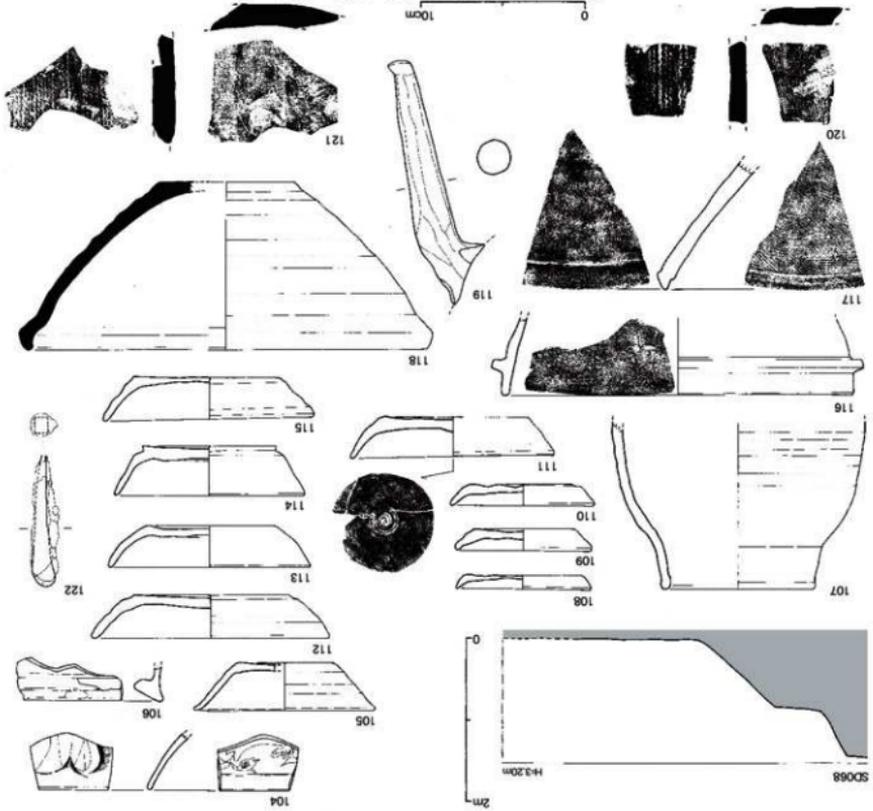
4区の調査 井戸もしくは溝と思われる046と溝(036)、柱穴群が出土した。

1. 溝

SD036(第10図) 東西方向の溝で幅58cm、深さ13cmを計る。覆土は暗茶褐色砂で土器小片が3点出土した。SX046に切られており、古代末から中世前半と考えられる。

SX046 幅1.3m以上、深さ55cmを計る。底面に円形の浅い窪みが複数見られる。大きさから溝もしくは井戸の可能性が高いと思われる。覆土は暗茶褐色で龍泉窯系青磁碗Ⅱ類や白磁壺片等が出土した。13世紀前半頃と考えられる。

第12图 6区探测图(1/40·1/60·1/3)



6区全体图(1/40)

2. 土坑

SK037(第10図) 東西80cm以上、南北67cm、深さ10cmを計る。白磁碗V類や糸切りの土師皿、瓦、滑石片等が出土した。12世紀後半と考えられる。

SK049(第10図) 南北1.2m以上、東西1m以上、深さ22cmを計る。覆土は淡茶褐色砂質土で、土師碗等の小片が出土した。古代末から中世か。

5 区の調査 井戸2基と土坑3基、柱穴1基が出土した。

1. 土坑

SK013 平面楕円形を呈し、径1.5×1.2m、深さ40cmを測る。主軸はN-47°-Eで、埋土は茶褐色砂である。糸切りの土師坏(第11図089)が1枚出土した。089は口径12.6cm、器高2.9cmを測る淡赤褐色を呈し、白色砂を少量含む。口縁の一部を欠く。

SK016(第11図) 平面楕円形を呈し主軸はN-45°-Eを計る。長径は1.1m程度、深さ47cmを測り、底面中央に径42cm、深さ7cmの窪みがある。覆土は茶褐色砂で糸切りの土師坏や須恵質の瓦片が出土した。中世前半か。

2. 井戸

SE019(第11図) 平面楕円形で主軸はN-29°-W、長径は2.5m、深さ1.8mを計る。崩落の危険があるため底面まで掘り下げることができなかった。14世紀頃と考えられる。出土遺物(第11図091～103)。091は青磁碗、092は陶器壺である。093～097は土師坏、098～100は土師皿で坏・皿ともすべて糸切りである。101は白磁の蓋で復元口径15.3cmを測る。102は土師質の甕、103は須恵質平瓦である。凸面は縄目庄痕の上からナデを施す。

SE021 SE019に切られる。崩落の恐れがあり下まで掘り下げることができなかった。須恵質鉢(第11図090)や土鍋が出土しており13世紀後半から14世紀頃と思われる。

6 区の調査 数基の柱穴状遺構の他、堀と考えられるSD068が出土した。

SD068(第12図) 調査区の3/4以上を占める。調査区内では東南側の立ち上がりが確認できず、幅4m以上、深さは1.4m以上を測る。調査区内で確認した底面の標高は約1.5mである。埋土中から雑多な遺物が出土したが、いずれも小片である。中世後半と考えられる。出土遺物(第12図104～121)。104は青白磁碗で外面は細い連弁、内面は蔓と葉を浮き彫りで表す。105は白磁皿X類、106は陶器盤である。107は陶器壺で灰黄褐色を呈す。108～110は糸切りの土師皿、111～115は糸切りの土師坏で111は内底面に渦巻き状の工具痕が残る。115は口縁内面と底部に煤が付着し、灯明皿である。113は口径12.0cmと器高2.55cmを測る。淡赤褐色を呈し胎土は精良で砂を含まない。調整は丁寧で111同様に内底部中央に渦巻き状の工具痕が残る。113は復元口径11.4cm、器高3cmを測る。赤橙褐色を呈し白色砂をわずかに含む。114・115は口径12.1cm、12.6cm、器高2.6cm、2.7cmを測る。116は土鍋で外面に煤が付着する。117は瓦質鉢、118は須恵質鉢、119は土鍋の脚で淡褐色を呈す。120・121は須恵質瓦片で凸面は縄目タタキを施す。122は釘釘で長さ約8cmを測る。本地点は承天寺の南端部に位置しており、『聖福寺古図』に描かれた承天寺の三方を囲む堀の一部である可能性がある。

7区の調査

7区は、3区の北東側に位置し、調査区は長さ9m、幅1.8mの範囲である。平成24年6月19日に表土の搬出と土留め矢板の設置を行い、翌日に調査を実施した。道路面から1.5m前後の深さで黄白色の砂丘砂となり、この砂丘面で遺構検出を行った。検出した遺構は、土坑・ピットである。この7区周辺は、同じ道路内で実施した192次調査で比較的遺構が密集している地点である。調査区北西側の砂丘面の標高はおよそ3.5m、南東側は削られたためやや深く、標高3.3m前後で砂丘面となる。土師器・須恵器・陶磁器など、コンテナケース1箱分の遺物が出土した。

1. 土坑

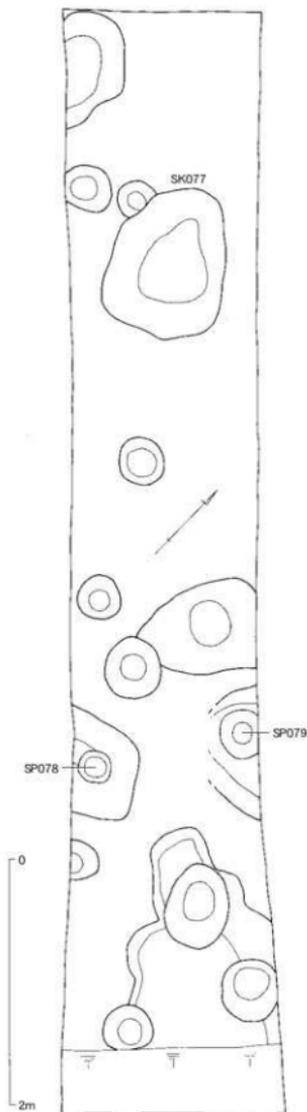
SK077(第14図) 調査区の北西側で検出した土坑である。長軸1.2m、短軸1.0m、深さ50cmを測り、埋土はしまりのない黒褐色砂である。出土遺物(第14図123~125)。出土遺物はポリ袋2袋分で、青磁片や陶器片も見られるが、土師器環が大半を占める。123~125は土師器環で、いずれも底部は回転糸切り、123・124には板状圧痕が認められる。口径はいずれも復元で、123は13.0cm、124は12.8cm、125は12.4cmである。この他に須恵器・青磁の小片が出土している。12~13世紀頃の遺構と思われる。

2. その他の遺物(第14図126)

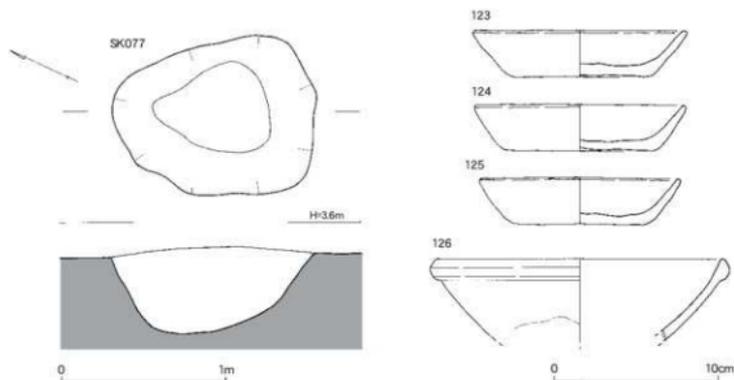
ピットからも少量の土師器・須恵器が出土したが、いずれも小片で図化できない。遺構検出時には土師器・白磁・瓦・染付などが出土している。126は検出時に出土した白磁椀IV類の破片で、玉縁状の口縁部である。復元口径17.4cmを測る。

8区の調査

8区は調査対象範囲の南端付近にあり、6区の北側、第192次調査の立坑部分南側に隣接する。調査区は長さ9.5m、幅1.8mの範囲である。平成24年6月26日に表土の搬出と土留め矢板の設置を行い、翌日に調査を実施した。道路面から1.5m前後の深さで黄白色の砂丘砂となり、この砂丘面で遺構検出を行った。検出した遺構は土坑・ピット・不明遺構等である。調査区北西側では標高3.2m付近で砂丘砂を検出したが、南東側は全体に黒色砂が広がり、遺物は含むものの、遺構か堆積土かは



第13図 7区全体図(1/40)

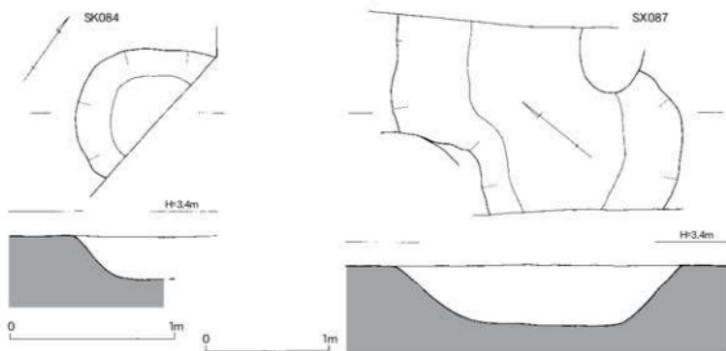


第14図 SK077 遺構・遺物実測図 (1/30・1/3)

判断できなかった。南東の黒色砂はSX082として報告している。土師器・須恵器・陶磁器・瓦など、コンテナケース2箱分の遺物が出土した。遺構の時期を決定できないものが多いが、いずれも中世以降のものと思われる。

1. 土坑

SK084(第15図) 調査区中央付近で検出した楕円形状の土坑である。半分近くが攪乱で破壊されているため大きさは不明であるが、残存で長軸0.9m、短軸0.8m以上を測る。深さは25cmで、埋土は茶色がかった黒褐色砂である。出土遺物(第17図127~129)。遺物は少量で、土師器・陶器小片が出土したのみである。127は土師器皿で、復元口径7.8cm、底径6.0cm。底部は糸切りで、体部および内面には回転ナデを施す。128・129は土師器杯で、それぞれ復元口径11.6cm、11.8cmを測る。129は歪みが著しく、復元径に不安が残る。ともに底部は糸切りで、128には板状圧痕が明瞭に残る。



第15図 SK084 (1/30)・SK087 (1/40)

2. 不明遺構

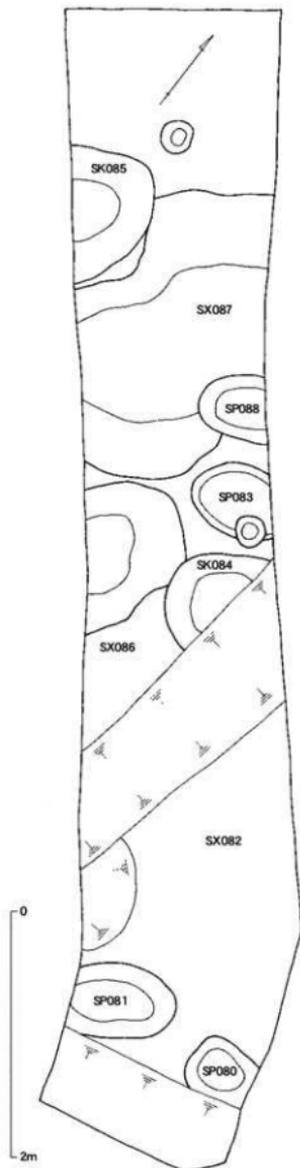
SX082(第13図) 調査区中央付近を横切る埋設管の攪乱より南側の黒色砂部分である。部分的な調査区であるため、明確な遺構か判断できず、不明遺構とした。埋め土の可能性もある。SP081はSX082に掘り込まれたピットと判断したが、同一遺構の可能性もある。黒色砂の厚さは約60cmで、底の砂丘面はわずかに南側に傾斜している。出土遺物(第17図130~134)。出土遺物はポリ袋1袋分で、土師器・須恵器・陶磁器・瓦などが出土している。130は土師器皿の破片で、復元口径8.0cm、器高1.5cmを測る。底部は糸切りである。小片のため、径・傾きに不安が残る。131は小片のためはつきりしないが、高台付の土師器皿または坏か。復元底部径は7.0cmで、丁寧な回転ナデを施す。残存器高1.8cm。132は土師器坏の破片で、底部を欠く。復元口径15.6cm、残存器高2.9cmを測る。小片のため、復元径は若干前後する可能性がある。内面には強いヨコナデによる稜線が残っている。133は白磁椀口縁部の小片である。内面には沈線がめぐる。134は白磁椀の底部である。底径6.2cm、残存器高3.2cmを測る。内面には瓣描文を施し、外面は高台部まで施釉されている。出土した遺物はいずれも小片のうえ散漫な出土状況で、遺構の時期を示すものか判断できない。

SX087(第16図)

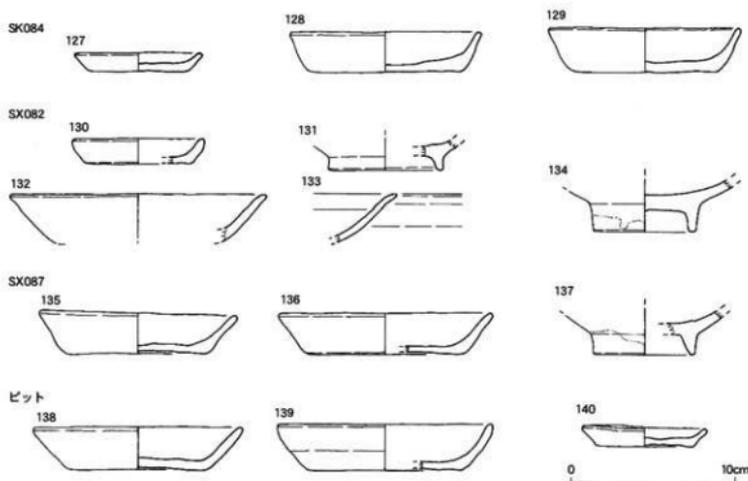
調査区北半で検出した不整形な落ち込みみであるが、調査区外に広がるため平面形は不明である。埋土は茶色がかかった黒褐色砂で、深さは50cm前後である。壁面の傾斜は緩く、底面は平坦気味である。出土遺物(第17図135~137)。出土遺物はポリ袋2袋分で、土師器・須恵器・青磁・瓦・鉄片などが出土した。135・136は土師器坏である。135はほぼ完形で口径12.0cm、底径8.8cm、136は復元口径13.0cm、復元底径9.6cmを測る。ともに糸切りで、136には板状圧痕も残る。135は内面に強く丁寧なナデを施し、底部内面には明瞭な段が残っている。137は白磁椀の底部である。復元底径6.2cm、残存器高2.7cmを測る。

3. ピット出土遺物(第17図138~140)

138・139は調査区南端のSP081から出土した土師器坏である。前述のようにSX082と同一の可能性もある。138はほぼ完形で、口径12.8cm、底径8.3cm、器高2.6cm



第16図 8区全体図(1/40)



第 17 図 8 区出土遺物 (1/3)

を測る。139 は小片で、復元口径 13.0cm、器高 2.8cm を測る。底部はともに糸切りである。140 は調査区中央付近の SP083 から出土した土師器皿である。完形だが歪みがあり、口径 7.6cm、底径 6.0cm、器高 1.3cm を測る。底部は糸切りである。

III. 小結

今回の 193 次調査地点は、国体道路に沿って東西に延びている砂丘の尾根に近い南側緩斜面上に位置する。この尾根筋沿いでは博多遺跡群の中で最も古い遺構が出土しており、弥生時代前期以降に住居が営まれ始め、古墳時代には前方後円墳や方形周溝墓が築かれるようになる。8 世紀後半には西側 300 m の地点に 1 辺 100 m の区画が出現し、区画の北西側では竪穴式住居や掘立柱建物、土壇墓などの遺構と共に帯金具、石帯等の官衙関連遺物が出土する。

今回の調査では弥生時代中期以降の遺物は出土したが、確実に弥生・古墳時代に遡る遺構は確認できなかった。遺構の多くは古代末から近世で中世の土坑、井戸、柱穴群や近世墓が出土した。遺構の密度は大博通り西側の町屋部分の調査に比べると薄く、長期間寺院の境内であったため開発が少なかったものと思われる。また 1 区と 5 区では境内の端に近い部分で井戸が出土するなど、境内の利用状況が僅かではあるが伺うことができる。また、成果としては『聖福寺古図』に描かれた承天寺の 3 辺を囲む堀の可能性のある溝 (6 区 SD068) を確認した。古図では堀に水が溜まった状態で描かれているが、砂層上に位置する博多遺跡群では水を湛えた堀の掘削は困難である。今回の調査では南側の縁を確認できなかったため更に深くなる可能性が残るものの、底面標高が 1.75 m と現在の湧水点 (標高約 1m 前後) よりかなり高いことが判明した。ただ周辺の調査では底面標高が 2m 前後と現在の湧水点より底面が高い井戸が確認されており、中世の段階で湧水点が下がる可能性が指摘されている。今後湧水点の変化等を詰めていく必要があるが、たとえ湧水点が高かったとしても古図に描かれているような満々と水を湛えた状況ではなかったと想像される。



1. 1区全景 (北西から)



2. 2区全景 (北西から)



1. 3区全景（北西から）



2. 4区全景（北西から）



1. 5区全景 (北西から)



2. 6区全景 (南東から)



1. SK053 人骨出土状況 (東から)



2. SK054 (北東から)



3. SK058 (南西から)



4. SK059 人骨出土状況 (北から)



5. SK066 人骨出土状況 (北西から)



6. SK056 (東から)



7. SD029 (北東から)



8. SD068 (北東から)

中央ジャッキ下の壁は掘り残して調査区左側2/3はSD029である。



1. 7区検出状況（南東から）



2. 7区完掘状況（南東から）



3. 7区検出状況（北西から）



4. 7区完掘状況（北西から）



1. 8区検出状況（南東から）



2. 8区完掘状況（南東から）



3. 8区検出状況（北西から）



4. 8区完掘状況（北西から）

報告書抄録

ふりがな	はかた147							
書名	博多147							
副書名	博多遺跡群第193次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1235集							
編著者名	屋山 洋 今井隆博							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1							
発行年月日	2014年3月24日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東緯	発掘期間	調査面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	町町村	遺跡番号				m ²	
はかたいせきぐん 博多遺跡群 だい193じちようさ 第193次調査	ふくおかしはかたぐ 福岡市博多区 はかたえきまえ1ちようめ 博多駅前1丁目	40132	20127	33° 35′ 41.5″	130° 24′ 39.9″	20120404 } 20120627	126.4m ²	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
博多遺跡 第193次	集落	弥生時代 } 近世	土坑・溝・ 井戸・墓	弥生土器・土師器・ 須恵器・貿易陶磁・ 近世陶磁		調査区の大半は 中世以来承天寺 境内であった		
要約	<p>193次調査地点は博多遺跡群の南東隅部に位置する。本調査区は砂丘の尾根に近い部分に位置し、近隣の調査区では弥生時代中期以降の住居や甕棺墓が出土しており、古墳時代になると尾根の頂部に前方後円墳や方形周溝墓が築かれるようになる。8世紀後半～10世紀には西側300mの地点に1辺が100mの官衙が出現し、その周囲では竪穴式住居、土壇墓などの遺構と共に帯金具・石帯等の官衙関連遺物が出土する。</p> <p>今回の調査では弥生時代中期以降の遺物が多く出土したが、確実に弥生・古墳時代に遡る遺構は確認できなかった。後世に削平されたものと思われる。検出した遺構の多くは古代末から近世にかけてのもので近世墓の他に中世の土坑、井戸、柱穴群などが出土した。また『聖福寺古図』に描かれている承天寺の3辺を囲む堀の可能性のある溝を確認することができた。</p>							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1235集

博多147

—博多遺跡群第193次調査報告—

2014年（平成26年）3月24日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社I・P
福岡市東区多の津1丁目5番7号

